

障害者をサポートする犬

—盲導犬と介助犬—

53期生

I 研究動機

私は、駅で視覚障害者が杖をついているのを見た事がある。そして、いつも、なぜ盲導犬を使わないのかと思う。だから自由研究のテーマにして、調べることにした。

II 犬とは…

犬の先祖は誇り高いオオカミ。人間はしだいに犬を飼いならし、共に過ごすようになった。集団で狩りをする点が共通していたこと、犬は残りものをあさる習性があること、他の動物が近づくと犬はほえるので、人間にとって有利であること、などが考えられる。

人間に対して忠実になった犬は、ときには悪人にいじめられたり、だまされ、殺されたりしてきたが、それでも犬は人間との固いきずなを保ってきたのだ。

今、世界中にどれぐらいの数の犬がいるのかはわからないが、種類としては、人間より大きいことから、リスのように小さいのまで四百種以上はいるという。人の心をなごませるペット犬、犯人を追いかける警察犬、災害時に人を救う救助犬、病人やお年寄を支える訪問活動犬、そして、障害者を助ける盲導犬、聴導犬、介助犬など、さまざまな人のために場面に応じて活躍している。

動物の中で犬ほど、人間のいつけに従い、命令どおりに行動する動物はいない。他の動物でもサーカスなどで見られるように、人間の命令に従うものもあるが、それらは人間にエサをもらうため、また人間の恐さをうえつけられて行動するものがほとんどだ。犬は人間と共に働いたり、人間の役に立つのが好きなのだ。主人に喜んでもらえることに、自分自身も喜びを感じる。それが生きがいでもあるのだ。

(1) 犬の鳴き声の意味

- ①強い〈ワン〉 ②〈クーン〉 ③〈ウー〉 ④軽い〈ワン〉 ⑤〈キャン〉 ⑥〈ウォーン〉
警戒、興奮 された時 さびしい時 相手を威し うれしい時 痛い時、 仲間へよびか
した時 攻撃する時 怖い時 ける時



(2) 犬のからだ

- ①目：犬は近視で色を見分けられない。視野は250度で、真横より後ろも見える。
②鼻：犬の鼻はよくきくが、犬に「かぐ」意志がなければ役に立たない。
③耳：犬は人間の数万倍も聞き分ける力を持っている。
④舌：汗の出ない犬にとって、舌は体温調整をする大切な器官。

- ⑤爪：犬の爪は走るときスパイクの役目をする。爪をひっこませることはできない。
- ⑥尾：犬はうれしい時はしっぽを振り、おびえたり自信がない時には、しっぽを股の間にしまいこみ、相手をおどす時にはしっぽを立てる。

III 盲導犬

(1) 盲導犬とは…

盲導犬は、盲人（視覚障害者）の目や足となり、安全に道案内をするように、特別な訓練を受けた犬のことをいう。少し難しいが、「盲導犬による歩行基準」という規則があり、国や地方自治体で認められた、公益法人の訓練所（9カ所）で訓練を受けなければならない。5年以上の経験のある訓練士が訓練した犬で、ハーネスをつけ、使用者証を持った視覚障害者と一緒に歩く時、はじめて「盲導犬」とよぶ事ができる。だから、盲導犬として訓練された犬でも、ハーネスを付けていなかったり、視覚障害者が使用者証を持っていなかったりすると、盲導犬として認められない。

(2) どんな犬が盲導犬になるか

犬はその先祖がオオカミであるといわれるように、においにはとてもするどい。そして走るのが速く、敵には勇敢に立ち向かう性質をもっている。しかし盲導犬になるには、そのような犬の個性がかえって邪魔になるのだ。

こうした犬の性質の中から、特に①性格がおとなしく、落ち着きのある犬や、他の動物にも攻撃敵ではない。②主人の言いつけをよく守る。③ほえたりかみついたりしない。④頭が良くて、働くことが好き——そんな性質の犬を選んで、盲導犬に仕立てるのである。具体的にはまた、①走ってはいけない。（いつも、目の見えないご主人と歩調を合わせて進まなければならない。）②長時間じっとしていることができなければならない。③絶対にほえたりかみついたりしてはいけない。④においに反応してはならない。⑤眼と耳を使って注意をはらわなければいけない。

こうして選び抜かれた性格の良い犬として、初めはおもに、シェパードが使われていた。日本でも、昭和40年ごろまでは、盲導犬といえばシェパードであると考えられていた。しかし、シェパードしか使えないというのでは、盲導犬を増やすのがむずかしいということがわかってきた。良いシェパードは、たいいてい展覧会などの鑑賞用になってしまうので、盲導犬に向くものが少なくなるのだ。（写真上シェパード、下ラブラドル）

そこで、ラブラドル・リトリバーという犬が、盲導犬として使われるようになった。ラブラドル・リトリバーは、もともと狩の手助けをする猟犬だ。先祖は、カナダの北方のラブラドル地方で、イヌット達に飼われていた。それがイギリスに連れてこられ、コリーやセッターの血がまじって、今のラブラドル・リトリバーになった。



▲写真1



▲写真2

ラブラドル・リトリバーの盲導犬は、今どんどん増えてきて、シェパードにとって変わる勢いだ。その理由は、手に入りやすいし、姿も気性もシェパードよりやさしくて、街を歩いても、人にこわがられないからだ。ラブラドル・リトリバーは、もとは猟犬だが、えものを追ったり攻撃したりする犬ではなく、しとめたえものを拾ってくる犬なのだ。また、ダルメシアンなどの犬でも、訓練すれば盲導犬になれるし、ニュージーランドでは使用者のニーズに応じて、12種類もの犬が使われている。ただし、ラブラドル・リトリバーやゴールデン・リトリバーでは、訓練期間が10ヶ月ですむのに対し、プードル、ダルメシアンでは3年もかかってしまう。

(3) 盲導犬になるまで

①生まれる

優れた盲導犬になるかどうかは、持って生まれた犬の性格が90%左右するといわれている。どんなに優秀な訓練士でも、その適性のない犬から優れた盲導犬は育てられない、ということだ。だから、優秀な血統の盲導犬を繁殖させるために、「繁殖犬ウォーカー」の協力が、とても重要になるのだ。



繁殖犬ウォーカーの手で、とり出された犬の赤ちゃん



母犬の乳をすう犬の赤ちゃん

繁殖犬ウォーカーは、優秀な母犬を盲導犬協会からあずかり、出産の世話から、出産した子犬の世話を、生後2カ月ごろまで愛情をこめて受けもつ。あずかった母犬は、普通のペット犬として飼いつづけることができ、又、生まれた子犬の名前もつけることができる。どこの訓練所も、各国の訓練所と情報交換し、優れた盲導犬の交配や、繁殖にとりくんでいる。この繁殖犬ウォーカーとは仕事ではなくボランティア。母犬の世話にかかる費用は全て負担する。

②子犬時代

子犬は、生まれてから約2カ月たつと、一般家庭にあずけられ、そこで約1年間育てられる。できるだけ子どもやお年寄りのいる家庭で、愛情たっぷりに育てられることが大切。ボランティアでこの里親になってくれる家庭を「パピーウォーカー」とよぶ。「パピー」は「子犬」という意味だから、「子犬と共に歩む人」という意味になるだろうか。

人間の場合生後2カ月でやっと首が座るころだが、子犬はもう乳離れしているし、1歳をすぎれば立派な成犬。乳離れした子犬を、いつまでも犬集団の中においておくと、人間社会への適応・順応がしにくくなる。逆にその時期が早すぎても、自分の同類である犬社会への不適応が生じる。将来、盲導犬として人間社会にも犬社会にも適応させるには、「かわいい子には旅をさせる」タイミングが大切だということ。

こうしてあずけられた子犬は、人間の家庭生活を肌で体験し、人間社会のルールや

マナーを学んでいくのだ。パピーウォーカーはこの1年間に、犬に特別な訓練をほどこすわけではない。ただ、トイレは決まった場所ですとか、人にやたらほえないとか、食事は決まった場所ですとかいった、最小限度のしつけをするだけである。

そうしたしつけ以外は愛情をいっぱいそそぎ、のびのび育てることが大事。そうすることで犬も、人に対する愛情・友情を感じ、同時にまた、リーダー（使用者）に対する犬本来の忠誠心も育ててくれる。（パピーウォーカーはボランティアなので、あずかり代や食事代は一切もらえず、予防接種や病気の治療費もすべて負担する。）



家族の愛情につつまれて、のびのびと育てられる。
 ◀きびしいしつけ訓練は必要ない。愛情をいっぱい注ぎながら、犬の本性を生かしていく。人なつこく親しみやすく、素直で言うことを聞き、なおかつ喜んで率先力を発揮できるような、そんな犬に育てていくのだ。

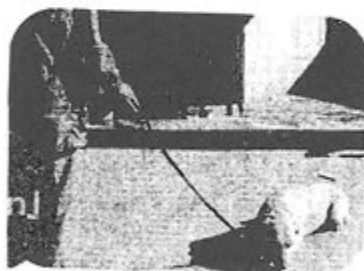
③協会での訓練

(i) 服従訓練

服従訓練とは、主人が言う英単語をきき分け、それに従う訓練である。なぜ英単語を使用するのかというと、日本語だと男女でしゃべり方がちがうからだ。例えば、男性が「行け」と言い、女性が「行きなさい」と言うと、犬は混乱してしまう。それに英語だと、短くて覚えやすいのも利点だ。



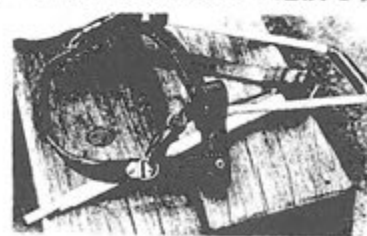
◀「Sit」
（オスワリ）



▶「Down」
（フセ）

(ii) 誘導訓練

誘導訓練とは、実際にハーネスをつけて、街の中で歩行訓練することだ。ハーネスとは犬につける胴輪のことだ。（右下）そして、盲人の歩行を妨げるものや危険を告知し、回避したりする訓練をする、又、車が来ている時に「Go」（進め）と言っても、従わない。知的不服従も教えられる。



(iii) 共同訓練

誘導、服従訓練を終えると、10日間の仕上げ及びテストの後、パートナーとなる盲人と共同訓練を行う。盲人と盲導犬は1日中共に過ごし、犬の世話も全て、パートナーである盲人がする。それが終われば、もう盲人の家へ行き、ずっと一緒にくらすのだ。盲導犬の寿命は15年ほど。つまり働けるのは12、3年だ。引退した犬は老犬ホーム（ボランティア）で大切にかわれ、盲人は新たなパートナーと共に過ごしてゆく。

IV 介助犬

(1) 介助犬 (Service Dog) とは…

介助犬とは、身体の不自由な人の手足となって、日常生活を助けるために訓練された介助犬のこと。介助犬は、障害者の心の支えでもある。

(2) どんな犬が介助犬になるか

犬種による向き・不向きはあるが、基本的に1頭1頭の性格や体格を重視するため特に決まっていないう性別も問わないが、身体障害者の歩行及び起立を助けたり、車いすを押したりするので、できるだけ大型犬がいいとされている。

(3) 介助犬になるまで

介助犬には、盲導犬のような育成システムがない。だが、他のボランティア犬と同じく、専門的な訓練の前に、必ず、きちんとした家庭犬のしつけが行われる。他人にほえない、あちこちで排せつしない、又、Wait（マテ）、Down（フセ）など、基本動作のしつけである。それが終われば専門訓練に入れる。訓練で大切なことは、体罰やえさなどを使った強制的な方法をとらず、信頼関係を築きながら教えることだ。

(4) 介助犬と暮らすことによって…

- ① 介助犬がドアを開けてくれて、いつでも外出できる。
- ② 介助犬との外出で、新しい人との交流が生まれる。
- ③ 介助犬との生活が、心に張りを与え、精神的に安定する。
- ④ 介助犬の世話をすることが、リハビリ効果につながる。
- ⑤ 介護者に頼らないプライベートな時間が持てる。
- ⑥ 介助犬の手助けて、障害者はもとより家族の負担も減る。



V 盲導犬、介助犬の現状

(1) 盲導犬

盲導犬は、残念ながら福祉関連法による法規定は、日本で盲導犬が誕生して50年たった今も、まだつくられていない。最近やっと、厚生省で財政支援の検討がなされているが、それもまだ実現していない。だから、盲導犬育成システムの運営は、様々なボランティアの手によって行われている。街頭での募金、バビーウォーカー、繁殖犬ウォーカー、引退犬ウォーカーなど、これは全てボランティアである。しかしこれでは、財政的にも人材的にも限界がある。

全国の盲導犬訓練所が世の中に送り出す盲導犬は1年に100頭程。しかも、盲導犬は10年余りで引退するので、100頭のうち半数近くが、再更新を希望する人にわたされる。盲導犬を待ちうる盲人はまだ全国で1000人以上いるという。これではどうしてそのニーズを満たすことはできない。

これから盲導犬育成事業が発展していくには、盲導犬への社会の認知度が高まっていくことと、国や自治体からの支援措置がなされることが、大切だと思う。

(2) 介助犬

今、日本で活動している介助犬は、10頭にも満たない。なぜなら、盲導犬のように、訓練する資格や方法が決められていないからだ。法的にはペットだからだ。お店へ行っても、「犬をおいて入って下さい。」と言われることがほとんど。障害者にとって体の一部である介助犬を、おいて入ることなどできるわけがない。つまり、そのお店を利用できなくなるということ。介助犬は、障害者が自由に外を出歩けるために訓練されたのだから、その介助犬を受け入れてもらえなければ、介助犬を持った意味がなくなってしまう。そのようなことをなくすためには、まず、「介助犬とは何か」ということを、法的にも明確にしていくべきではないだろうか。

VI 総括

障害者は、同情より理解をとうたっている。例えば、道路上のごみ箱や、自転車の置き方に対するちょっとした配りよで、障害者が安全に通ることができる。ほんの小さな心づかいが、やさしさの第1歩なのではないだろうか。

調べていて1番おどろいた事は、盲導犬、介助犬の育成が、全てボランティアの手で行われているということだった。生まれた時から、いや、生まれることすらも、ボランティアの協力で行われる。子犬の頃はバビーウォーカー、引退してからは引退犬ウォーカーと、様々なボランティアに支えられて、盲導犬、介助犬は育成されているのだ。訓練中の育成費も、ボランティアの人達が、街頭募金で集めたお金だ。さらに、日本での現状がどれほどきびしいか、欧米に比べてどれほど遅れているかを知った。きっ茶店、レストランなどで、介助犬はもちろん、市民犬として認められたはずの盲導犬までもが利用拒否されるという。もっと社会が、障害者や障害者を介助する犬を受け入れ、障害者が堂々と歩ける国になればいいと思う。また、私も、自分でできるボランティアに積極的にとりこんでいきたいと思う。

VII 参考文献：ありがとうシンシア 小田啓明 講談社 盲導犬誕生 日本ライトハウス